

# 血

田中浩司

自分自身の考え方を变えることは簡単なことである。私は、自分は不幸な人間だと思っていたが、考え方を变えることにより、一瞬で幸福になった。

父は血尿が出ていたり、また、オシッコから膿や異物が出てきている。本人に聞くと「出ていない」と言う。

血尿は、トイレでオシッコをし終わった後、トイレから出てきて歩いた後、畳の上にポタポタと落ちている。また、ベッドにもポタポタと血が付いている。「お父さん、これは血だろ」と言うと「血じゃねえら」と応える。

その血の中に硬そうな異物もあるときがある。異物は黄色をしている。ベッドをめくってみると、乾燥した黄色の異物がパラパラと粒になって落ちている。こんな物が尿道を通ってくるから痛いはずだ。しかし父は病気を悪ととらえていて、自分が悪い人間だと思いつ込んでいるようだ。そして痛くても痛いとも言わない。包括支援センター（老人の介護や生活を支援する市から委託された所）や市役所に言うところ「がまん強い」と言われるが、私は「いや、精神病だと思う」と言い返す。市役所からは「浩司さん、ねばり強くお父さんに泌尿器科へ行くことをすすめてください」と言われる。

父親の主治医にも血尿が出ることを電話で伝えたが、なにもしてくれなかった。また、ズボンの裾の所にも血がポタポタと付いている。私は「お父さん、泌尿器科へ行ってください」と言うと、父は、六軒も七軒も向こうに聞こえるくらいの大きな叫び声をあげる。そして「俺をいじめている」と言う。

私は、父だけではなく母を助けてあげてもかえって文句を言われる。今は、私を守ってもらうために市役所で保健師を付けてもらった。その保健師に相談すると「お父さんはどうして泌尿器科へ行かないのですか」と問われるが、私は「なぜなのか意味はわからない」と応える。

父はこういう人なのだ。父にかぎらず人を私と同じ人間に変えるには自分の全生涯をついやしてしまうはずだ。そして自分自身の人生を無駄にしてしまうだろう。人は人それぞれ考え方で行動している。父はこのままいけば死んでしまうだろう。しかし、これも父の選んだ人生なので、そこまで関わる必要はない。私は私の人生を生きればいいだけである。こう考えると気が楽で、生きていくことが楽しくなる。

そして、父から虐待を受けてきたが父が死んでしまえばつまらない。面白くなくなって

しまう。張り合いがなくなり、おそらくうつになるかも知れない。父は戦争体験者で戦争には行かなかったが、異常な冷たい人間である。しかし、本人が死にたいのだから仕方ない。焼酎を毎日三合も飲んでいて、血尿が出たり膿や異物が出たりしているのに、こんなものを飲んだらいけないと思う。そして焼酎を飲み終わった後、その焼酎の残りと一緒に血圧を下げる薬も飲む。本当に死にたいんだなあと思う。

昨年のことだが、包括支援センターの担当者が家にきて、私たち家族のいる前で、父に酒をすすめる発言をしたことには驚いた。

その担当者は、「お父さんに酒を飲ませてあげてください。酒を飲んでいる人は酒を飲んでいる人でなければ気持ちいわからない。浩司さんは文章を書くことを辞めて楽しいですか」と言った。甲府市の職員が酒をすすめる発言をするとは、本当に驚きである。おそらくその担当者と父が会ったとき、父が酒を楽して飲ませてほしいと頼んだのであろう。酒を飲み続けていけば体を壊してしまうのは当たり前である。父が死んだら包括支援センターの責任にすればいいのだ。

その後、酒をすすめたことをその担当者に直接聞いてみたが「覚えていない」と言う。この担当者はかわいそうな人だ。

父は、甲府市の南部に位置する右左口という山奥の出身で、中学を卒業するとすぐに甲府の中心地にある会社へ勤めた。

勤務が終わると定時制高校へ通った。右左口の自宅に帰ってくるのは夜遅く十一時頃だった。そしてまた、朝早く会社へ行くという大変な苦労をした。行きは自転車で坂を下るが、定時制高校からの帰りは山道をひたすら自転車を押した。

定年退職しても私から嫌われて、心が落ち着かなかっただろう。何か趣味もあるわけではなく、ただ酒を飲み頭を麻痺させるのが楽しみであった。

父が周りと関わりを持たなくても、やはりどうしても私は父と関わりたい。だから毎日のように市役所へ行き、父の状態を伝えている。市の職員も「お父さんのために市と包括支援センターと連携をとり万全な体制を調えています。今後、市の方でも田中さんの家へ行き、お父さんと話し合いたいです。でも市に執行力はないので病院へ連れて行くことはできません。でも、浩司さん、今後のことはまかせてください」と言ってくれている。

新聞配達の仕事から帰ってきて、父のベッドを見ると、寝小便をした跡があり、血で真っ赤に染まっている。アンモニアの臭いが強烈である。

「こんな奴実際助けてやるかあ！」

